

3学年通信

尾道市立高西中学校
3学年通信第28号
令和2年7月20日

No Charity but a chance

～道徳の授業より～

困難に負けず、障害者の自立に向けて、スポーツ大会開催や働く機会を提供することで、障害者に生きる自信と喜びを与えた医師の生涯を描いた「No Charity but a chance」という資料をもとに、社会参画と公共の精神について考えました。

この資料には「日本の障害者福祉の父」と呼ばれた中村裕医師が登場します。今でこそ当たり前のように開催されているパラリンピック。しかし、60年前は障害者がスポーツをすることは日本では考えられませんでした。また、社会に出て働くことも非常に困難でした。そんな日本の状況を打ち破り、障害者の社会参画を後押ししたのが中村医師です。

その中村医師が「なぜ彼らの生きがいを失わせてはならない」と考えたのか、そして、社会で生きる喜びとはどのようなことかを考えた1時間でしたね。

1960年。イギリスの国立脊髄損傷センターを訪れた中村医師は、院長のグッドマン博士の言葉に驚いた。「ここでは、脊髄を損傷した患者の85%が、6ヶ月で社会復帰しています。」当時の日本では、社会復帰できるのは2割程度、しかも半年かかるといわれていたからだ。

「いったい、何が違うのだろう…。」

グッドマン博士の「手術よりスポーツ」という考えに基づくりハビリテーションこそが社会復帰の根源だった。

帰国した中村医師は、さっそく障害者スポーツに取り組むも、「障害者は保護すべき」という社会の厚い壁に何度もはね返された。そしてようやく開催されたパラリンピック。しかし、中村医師は参加した外国人選手がほとんど仕事を持っていることを知り、障害者の社会進のためには働くことが重要だと気づく。しかし、働く場所はあまりにも少ない。

中村医師が訴え続けた障害者の働く意義。その熱意は、やがて働いて社会に進出する機会を多くの障害者にもたらした。

その後も障害者のスポーツ大会の開催に力を尽くした中村医師は、世界中の障害のある人々にスポーツと労働をとおして、社会の中で生きる自信と喜びを与え続けた。

【社会で生きる喜びとは？】

- ・一人ではできないことを、誰かと支え合ってなしとげること。
- ・誰かのために働くこと。誰かの役に立つこと。
- ・自分のよさ自分が生み出した者を認めてもらったり、人に喜んでもらえたりすること。
- ・どんなことでも一生懸命にすること。
- ・自分が頑張ることで社会の役に立てたり、相手に喜んでもらえたりすること。
- ・自分が周りの人、社会のために貢献できている達成感。

【感想より】

- ・私も人の幸せを自分の幸せだと言えて、そのために、誰かと支え合えるような人になりたいと思いました。
- ・私は社会で生きる喜びを考えたことはなかったけれど、これからは、自分のためにも誰かのためにも一生懸命行動していきたいと思いました。
- ・自分が社会に出た時、一人ではできないこともあると思うから、人と人々が協力しながら助け合って社会に貢献していこうと思いました。また、社会だけでなく、普段の生活、学校生活での過ごし方も誰かの役に立てるように頑張ろうと思いました。
- ・私の社会で生きる喜びは、誰かのために何かをした時です。お互いに気持ちよく生活するには、相手を思いやることも必要です。中村さんと障害者の人たちのように、よりよい社会を創っていきたいです。
- ・自分のことはもちろん大事だけど、それだけではなく、人のため、社会のために頑張れる人が、僕は素晴らしいと思う。そんな人が、周りからも慕われる人だと感じた。自分も中村さんのような目標を持って、人のため、社会のために全力を尽くせる人になりたいと思った。